

序 論

われわれの住む青い惑星，地球は太陽系の一員として太陽の運行とともにある。そして，地球上に広がる陸と海洋の世界には65億の人びとの暮らしがあり，多様な人間模様が繰り広げられている。

久しく，自然と人間の両世界をまたぐ地理学，特に人文地理学は，自然を環境という概念でとらえ，それと人間との係わりをその中心的な命題として取り上げてきた。本来，その係わりは多様であり，宿命と解放，不易と流転，あるいは安定と変革というように二項対立的にとらえることもできよう。しかし，科学精神に立脚しようとしたラッツェル（F. Ratzel）に代表される初期の近代地理学者たちは，人間と環境との係わりを変わりにくい安定した局面においてとらえ，それに環境の側から迫ろうとした。そのため，他の学問分野から環境決定論という批判を招くことになった。そうした硬直的で一方的な環境観から人間の主体性を取り戻そうとしたのが，フランス地理学派の祖と仰がれるヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ（P. Vidal de la Blache）であった。彼は環境の重みを十分に弁えながらも，その歴史性と社会性にこそ，環境との係わりにおける人間の主体性が発露することを喝破した。歴史性は，文化と読み替えてもよいし，時間・変化の概念にも通じる。また，社会性は，人間のさまざまな営為のシステムやプロセス，あるいはその集団的な括りとその組織などに係わる。本書に照らしていえば，それらは家々の分立主義と散村・耕地圍繞制，水利集団と水利規制・共同，中心と周辺，ムラとマチの関係などとしてとらえられようか。

本書は，人間の社会性に注目して，地域に生き，地域を形成し，地域を構造化する人々の営みとその結果を社会的側面からとらえる社会地理学の立場に立つ。したがって，社会的事象の空間的側面に注目し，社会空間の枠組みにおいて諸事象をとらえることが本書の主たるテーマとなる。しかし，社会地理学が追究する事象には当然，社会的要因のみならず，他の経済的・政治的・文化的要因等も深く関わっている。そうした認識こそ，本書の副題に“暮らし”という視点をとり入れた所以でもある。そこで，経済的・政治的・文化的要因やその作用結果としての諸事象との係わりにも注目し，相互に関係し，影響を与え合うという文脈において社会的事象とそれに係わる諸事象をとらえる「複雑性」という考え方を，論理構成の今一つのベースとしている。この「複雑性」の思想については，第13

章で詳しく論じる。ここでは、都市近郊の混住化地域に代表されるような今日の「るつぽ」的な状況は、一つの論理だけでもって裁ち切って論断できるような単純なものではないことを強調しておきたい。むしろ、地域の「複雑性」を承認した上で、多様性を許容する論理を組み立て、多様なアプローチを行うことが求められているのではないか。

そうした観点から、散村地域におけるムラ・マチ地域の展開について論じた第Ⅱ部「ムラ・マチ地域の形成と展開——砺波散村地域——」では、散村社会の組織・構造・機能やその空間的事象を論じるだけでなく、それと深く係わる水利や開発システム、あるいはムラの在り方に大きな影響を与えたマチとの関係も視野に入れてより大きな視点からムラをとらえることに努めた。そして、広域祭祀圏といった文化事象をも社会空間の考察の中に組み込んだ。また、都市化にさらされてきた“周辺”地域を論じた第Ⅳ部でも、大きく都市圏全体の中に“周辺”地域を位置づけて、社会事象のみならず、その背景にある経済事象も分析対象に加え、地域経済の側から地域社会を照射することを試みた。

今一つは、時系列的な展開に留意したことである。様々な事象は、それぞれを構成する多様な要素・要因が複雑に絡み合い、関係し合いながら、時間という軸に沿って生起している。したがって、歴史的事象の解明に当っては、その紡がれた事象を時間軸に沿ってその絡み合った糸を解きほぐす作業が欠かせないと考え、できるだけ丁寧にその作業に取り組んだことである。

まさに以上の2点が、書名に“時空”という言葉を盛り込んだ所以である。

以下、本書を構成する各部の概要を記しておく。

第Ⅰ部「社会の地理学的研究の視点—フランス地理学から—」では、フランス地理学派を中心とする学説史的な展望を行いながら、本書の基底をなす社会の地理学的研究の思想的基盤と、その基本的な枠組み・方法論などについて考究する。具体的には、フランス地理学派の祖と仰がれるヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの「歴史性」・「社会性」への注目を「人間性」追究の視点としてとらえ、それを本書の基底に据える作業を行う。その上で、彼を継承するフランスの代表的な地理学者たちについて、社会の地理学的研究の視点・方法・研究枠組み、および生活様式、地的統一、心理的要素、地域経済、集落、技術総体といったそれぞれの基本的な概念について比較、検証する。特に、人間の社会性に関する地理学的理解、各レベルの社会単位、およびその空間的・地域的反映としての社会空間などに関するそれぞれの概念的枠組みを明確にし、本書における社会の地理学的研究の枠

組みと方法論の構築に資する。

第Ⅱ部「ムラ・マチ地域の形成と展開——砺波散村地域——」は、散村地域の社会空間構造についてムラとマチの両面から、そして視野を社会的側面のみならず経済的側面にまで広げて、歴史的展開を踏まえながら検証する。まず、散村の成立過程と起源論について論じ、次いで近世における散村の社会空間構造の変遷を跡付け、そこに一貫して認められる散村の社会的特性と社会空間構造を発達史的に明らかにする。次いで、村落の枠組みを超えた広域水利組織と神社の広域祭祀圏の分析から、ムラを基礎的社会単位として重層的な広がりを見せる広域社会空間の構造について論じる。さらに、年貢収納圏、商品生産・流通圏、在村商人の分析から近世におけるマチを中心としたマチ・ムラ地域の構造とその時・空間的展開を多角的に論じる。さらに、近・現代における急激な社会・経済的変容、特に圃場整備という散村の生活・生産空間を大きく塗り替える変革に対して、散居という居住様式がどのように対応をしているのかを検討し、基本的には散居を維持する方向にあることを検証する。

第Ⅲ部「山村社会の衰退と持続」では、近・現代における山村社会の存続と衰退という両局面にアプローチする。吉野山地では、共有林野が存続するのか、それとも分解・消滅していくのかということが村落社会の在り方に深く関わっていることを検証する。また、高度経済成長の渦の外に取り残された低開発地域の山村社会が、挙家離村による社会的機能の弱体化のため過疎に陥るプロセスを多面的かつ実証的に明らかにする。特に、共有林野のありようがその動向に大きく影響している点を検証する。四国山地では、別居隠居制という家制度の様相がムラ空間の土地利用に大きく投影されていることを、隠居とオモの土地保有分担と土地利用の差違から解明する。

第Ⅳ部「都市化と“周辺”地域」では、まず社会的流動性の高い都市圏に関する地域研究のレゾンデートルを検討し、「文化」と「複雑性」の視点からその地域研究フレームワークの構築を試みた。そして、中心の側から語られてきた観の強い大都市“周辺”地域を“周辺”の側に視点を据え直し、“周辺”からみた大都市圏の3地帯（近周辺・中周辺・遠周辺）の構造を明らかにする。

次いで、中周辺地帯にあって都市化の影響を受けて経済的、社会的に大きく変容を遂げながらも、基底的にはムラ意識を保持し続けている地付き民（旧住民）と、都市的意識を持つ新住民とが混住する“周辺”地域社会の実像を地付き民・ムラ社会のサイドから描出する。同じく中周辺地帯にありながら住宅都市的な発展

を遂げている地域における地域経済変容の実態とその地域社会への影響を、“市民経済”という視点を採り入れながら検証する。また、地方都市の近郊地域への大規模工場進出が地域経済、特に労働市場に大きなインパクトを与え、ひいては地域農業、それを基盤とした農村社会、そして人びとの暮らしや意識にも大きな影響を与えていることを検証する。

以上のように、今日の“周辺”地域や村落社会は、それらを取り巻き、あるいはそれらを取り込みながら大小様々な影響を与えているより大きな社会・経済空間との関係の分析を抜きにしては語られ難くなっている。また、「複雑性」の視点からしても、地域社会と地域経済は相互に密接に係わりあった仕組みの中で運動している。したがって、地域経済という視点も地域社会の分析に採り入れることが有効である。それが、この第IV部の今一つの主題でもあり、本書の補完的テーマである“暮らし”の視点につながる。

なお、後掲の初出一覧にあるように本書に所載した諸論考はいずれも1969年から1996年にかけてのものであり、現況とは異なる点があるが、それぞれの時点での研究の結果であるので、現況に合わせることはしなかった。あえていえば、近世から近代、そして高度経済成長期というタイムスパンにおける、それぞれの課題に応じた時間設定がなされたということである。なお、初出論文の所載に当たっては、必要な範囲で加筆修正を加えた。